

令和7年度
金沢大学ステークホルダー協議会
実施報告書

令和7年12月
国立大学法人金沢大学

概 要

日 時：令和7年10月31日（金） 13:30～16:00

会 場：金沢大学自然科学系図書館G1階〔石川県金沢市角間町〕

全体会・まとめ：AVホール

分科会：グループスタジオ各室

プログラム：

13:30 開会

学長挨拶・近況報告

14:20 分科会

15:30 分科会報告・全体意見交換

16:00 閉会

参加者数：97名

【参加者内訳】 ※()はオンライン参加者で内数

学外：38名（7名）

自治体3名（2名）、企業7名、

高校関係10名（2名）、地域5名、

大学関係4名（1名）、学友会1名、

元職員2名、学生の父母等1名（1名）、

報道機関1名、卒業生1名、

その他3名（1名）

学内：教職員30名（6名）

（うち会場事務スタッフ13名）

学内列席者：29名



開会のあいさつをする 和田 学長



意見を述べる安宅 建樹 学友会会长



閉会のあいさつをする森本理事

ステークホルダーのご意見

分科会

参加者は 6 つのテーブルに分かれ、本学教職員とステークホルダーの皆様による「オール金沢大学」で意見交換を行いました。

A グループ

テーマ：イノベーター育成の実現～STEAM 教育と STELLA プログラム～

ファシリテーター：尾島 恵子 副学長、本田 光典 学長補佐

ステークホルダー：企業 2、高校関係 4、大学関係 1、地域 1

本分科会では、STEAM 教育と STELLA プログラムを中心に、以下の大学の取り組みについて説明があり、その後意見交換を行った。

- ①全学体制での STEAM 人材育成の概要説明
- ②小中高大院混成による STELLA プログラムの概要説明
- ③多様な視点から探る STEAM 教育と STELLA プログラムの課題



【意見交換】

1. STEAM 教育・STELLA プログラムの評価

- ・企業関係者からは STEAM 教育を通じて課題解決型人材が育成される点について、高校関係者からは STELLA プログラムの人材育成や継続性について、高い評価を得た。

2. プログラム参加に関する課題と工夫

- ・STELLA プログラムに期待する一方で、高校生は探究学習や部活動などで多忙であり、プログラムとの両立が困難な場合が多い。プログラムに魅力を感じていても、自宅から大学までの距離を踏まえると、地理的要因で参加のハードルが高い場合も多い。
- ・多様な生徒が参加できるよう、プログラムの柔軟性を高める必要がある。具体的には、遠隔対応可能な研究課題の選択やオンライン指導の充実など、参加のハードルを下げられることが良い。
- ・遠隔地からの参加は、オンライン対応などもあるが、情報が十分に届いていないと感じるため、Web サイト以外の広報にも力を入れてほしい。
- ・高校ではグループ研究が主流だが、STELLA プログラムは個人研究となるため、個人研究とグループ研究の両立が課題になる。

⇒STELLA プログラムは、グループ研究で得た知見を活かし、個人研究で深堀りしたい場合に活用してほしい。

- ・探究 STEAM フェスタの開催時期は、12 月では早すぎる印象がある。1 月以降に開催することで、参加対象の高校 1 年生の参加意欲を高め、次の探究学習へ接続しやすくなる。
- ・地域によっては 18 歳人口が増加傾向にあり、女子の理系進学も増加しているため、今後、女性研究者を目指す生徒への支援が求められる。
- ・参加人数の増加に向けて、周知方法について工夫が必要となる。

3. 地域・社会との連携によるイノベーター育成と今後の期待

- ・企業では、英語によるコミュニケーション能力はもちろんのこと、それ以上に「課題解決力を持つ人材」を重視している。
 - ・インターンシップで受け入れた場合などは、個人研究は、より専門的な研究に発展し、その後、採用につながるケースも多い。
 - ・ジュニアドクター育成塾に協力させていただいた際に、すごく優秀な子供たちがいて驚いた。
- ⇒本学では、STEAM 教育や STELLA プログラムを通じて、小・中・高・大、そして社会へとつながるイノベーターの育成を目指しており、今後もステークホルダーとの連携の一層の強化を図りたい。

B グループ

テーマ：多文化共修教育と人材育成

ファシリテーター：長谷部 徳子 副学長、谷内 通 学長補佐

ステークホルダー：自治体1、高校関係3、地域1、学生の父母等1

本分科会では、本学の「大学の国際化によるソーシャルインパクト創出支援事業」との関係性を踏まえ、以下の実情について説明があり、その後意見交換を行った。

- ①多文化共修教育に関する本学の取り組みの背景と計画の概要
- ②日本人学生の海外派遣の状況
- ③外国人留学生の受入の状況

【意見交換】

1. 多文化共修教育への印象

- ・留学生が日常的に存在し、交流できる環境は魅力的に感じる。
- ・高校でも、外国人留学生の存在が学校全体を活性化させている。
- ・留学生との自然な交流が「当たり前」になることが重要であり、そのための質的な転換が必要である。



2. 日本人学生の海外留学促進に関する課題と提案

- ・近年の高校生は留学意欲が高く、短期留学やホームステイの参加者は増加傾向にある。
- ・留学促進には学生への経済的支援が不可欠であるため、国や県の助成制度に加え、大学独自の奨学金や企業・同窓会からの寄附を活用する仕組みが求められる。
- ・留学を勧める上では、「留学経験が重要」という抽象的な説明では動機づけが弱い。留学の目的と得られる効果を具体的に示すことが重要である。
- ・留学経験者や卒業生による体験談の共有が効果的であり、特に、留学に興味がなかった学生が変化した事例をロールモデルとして提示することが有効だと感じる。
- ・実業高校向けの海外インターンシップ制度の事例は、目的意識の高い学生に有効であり、大学でも参考になる。

3. 金沢大学の国際性・ブランドイメージの強化

- ・どの大学も国際化や留学推進に取り組んでおり、差別化が難しい。金沢大学独自のイメージづくりが必要だと感じる。
- ・金沢大学の先端的な研究や教育を紹介する際に、国際的に展開していることをアピールすることで、国際性についてのイメージ向上につながるのではないか。
- ・金沢大学に在学中の外国人留学生や日本人学生が高校に出向いて説明する機会や、高校生との交流イベントを実施することで、大学のブランドイメージの強化にもつながる。

4. 留学生受入環境

- ・留学生は地域に居住するため、地域に根差した国際化が必要である。金沢市内には日本語能力が十分でない外国人家族も多く、大学の協力が期待されている。
- ・外国人が普通にいる環境、当たり前に交流する環境を作っていく必要がある。
- ・留学生との共修を「当たり前」にするため、授業やキャンパス環境の工夫が必要である。

C グループ

テーマ：金沢大学が進める世界トップレベル研究・产学連携の進捗

ファシリテーター：後藤 典子 学長補佐、吉村 優子 学長補佐

ステークホルダー：企業2、高校関係3、大学関係1

本分科会では、以下の大学の取り組みについて説明があり、その後意見交換を行った。

- ①地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（J-PEAKS）の概要
- ②未来知実証センターの施設紹介
- ③独創的な世界トップレベルの研究
- ④本学の大学院教育の取組み



【意見交換】

1. 博士人材の認識と産業界の期待

- ・博士号取得の意義や博士論文の価値、修士との違いについて、社会での理解や評価が統一されておらず、「博士の強み」が十分に認識されていない印象がある。
- ・企業では、学位の違いよりも個人の課題抽出から解決までの行動様式や協働力を重視する。
- ・特に現場即応型の部門では、博士課程での高度で専門的な研究経験が職務内容と直結しない場合もあり、採用でミスマッチが生じやすいが、博士課程で培われる分析力・課題設定力・マネジメント力・応用力は、産業界でも活用できるため、その価値を大学側が可視化し、積極的に発信することが必要である。
- ・グローバル社会に対応するため、言語能力だけでなく文化差を超えたコミュニケーション力の育成が重要視されている。

2. 大学院教育とキャリア形成支援

- ・博士の進路は研究職に限らず、企業就職やベンチャー創業など多様化しており、大学院教育は産学連携を強化していく必要がある。
- ・大学院修了者が専門外の職に就くケースも多いため、キャリア形成支援の強化が重要である。地域のキャリアコンサルタント等との連携による伴走支援が求められる。

- ・大学院修了者の中には就職活動で進路を見通せずにいる人もおり、研究と社会の接点を早期に提示する仕組みに加え、キャリアに関する相談や交流の場を整備することが必要である。

3. 高校探究学習と大学の連携

- ・高校生に大学のトップレベル研究や学問の楽しさを伝える機会を増やしてほしい。
- ・探究活動の充実により生徒の主体性は高まっているが、基礎学力の低下への懸念もあるため、高校から大学への接続時に探究力と基礎力の両立を図る仕組みが必要である。
- ・地域では大学が遠い存在になりやすいため、博士号を持つ教員の配置や大学教員の高校への出向などを通じて、高校生に大学の魅力を直接伝える取り組みを行ってほしい。

4. 産学連携と地域協創

- ・未来知実証センターとの意見交換や企業が実施するインキュベーションラボ等を活用し、大学と企業が連携して社会課題解決に向けた取組みを強化することが望まれる。
- ・企業は現場実務と成果を重視し、大学は研究課題に沿った高度な学びと研究開発を重視する傾向がある。学生の希望と企業の目的が合致するよう、採用や実習の段階で両者の期待をすり合わせることが重要である。

D グループ

テーマ：多様な人材が活躍できる研究・産学連携とは？
～社会人学生をはじめ、誰もが参加できる仕組みや環境づくり～

ファシリテーター：森下 英理子 学長補佐、大黒 多希子 学長補佐

ステークホルダー：企業2、地域2、その他1

本分科会では、本学のダイバーシティ・エクイティ・インクルージョン推進を基に、以下の3点について説明があり、その後意見交換を行った。

- ①「多様な人材」の定義
- ②金沢大学の研究・産学連携におけるダイバーシティ推進機構等の活動
- ③研究・産学連携へ誰もが参加できる仕組みや環境づくりの課題



【意見交換】

1. 組織の風通しとダイバーシティ推進

- ・外部から見えにくい組織形態や、専門領域にとらわれる閉鎖的な文化は、意思疎通に支障をきたし、多様な人材が活躍しにくい環境を生む。柔軟性ある組織運営も必要である。
- ・企業では、日常的な交流や対話の場を増やすことや、専門分野に偏らず複数の領域を持つこと、ポジションを流動的にする仕組みづくりなどが有効であった。

2. 人材育成とキャリア形成の多様化

- ・企業では、ジョブローテーションを通じて多様な経験を積ませ、事業の継続的な発展や人材育成に有効だった。3~5年ごとの異動が社員の視野を広げ、幹部候補の育成につながった。大学では、事務職員は異動することが定着しているが、教員は専門分野に固定になりがちなので、研究が硬直化するのを防ぐためにもポジションチェンジがあるとよい。

- ・大学でも、ダブルメジャー（大学で複数の異なる専攻分野を同時に主専攻として学ぶこと）や異分野の知識を組み合わせる教育が進みつつある。
- ・社員一人一人がキャリアデザインを主体的に考えられる仕組みづくりが、組織の活性化につながる。

3. 企業・地域と大学の連携強化

- ・大学は敷居が高い印象がある。企業としては、大学から積極的にアプローチしてほしい。
- ・企業との接点を増やす仕組みづくりや、バウンダリープレイヤー（組織の壁を越えて連携を促進する人材）がいると良い。
- ・企業では、社外や異業種との対話を頻繁に行うことで、組織文化が急速に変化した事例があった。利害関係のない場での交流が新しい発想を生み、社員の視野を広げる効果がある。
- ・地域としては、大学生が地域活動や福祉活動にもっと関わる機会を増やしてほしい。大学と地域が協働し、学生が自発的に地域課題に参画できる仕組みづくりや、サークル活動を地域貢献と結びつける取り組みの実施を期待している。

4. 外国人・女性人材の活躍と課題

- ・企業によってはトップダウンで女性活躍を推進しており、管理職比率の向上や自主的な活動の促進が進んでいる事例がある。自然発生的に女性社員が文化変革をリードする事例もあり、「言いたいことを言える場」の整備が重要である。
- ・外国人社員の受入により企業組織が活性化した事例もある。具体的には、マレーシア出身社員の入社で社内の「当たり前」が問い直され、経営計画に新しい文化の視点が盛り込まれた。
- ・企業では、近年外国人留学生の採用意欲が高い一方で、留学生の日本語能力によってはコミュニケーションの課題がある。大学には、対話がスムーズにできる程度の日本語教育も実施してほしい。

E グループ

テーマ：地域の未来を創造する大学の役割～能登の創造的復興に向けた取組～

ファシリテーター：篠田 隆行 学長補佐、枡 儀充 社会共創推進部長

ステークホルダー：自治体1、企業1、大学関係2、地域1、元職員2

本分科会では、以下の本学の取組について説明があり、その後、未来社会を創造するための大学の役割に焦点をあて、意見交換を行った。

- ①金沢大学の未来ビジョン「志」について
- ②急性期の取組（発災からの1年）
- ③復旧から復興へ（現在から未来へ）



【意見交換】

1. 研究・学生ボランティアの評価と継続的関与

- ・金沢大学の「令和6年能登半島地震における調査ガイドライン」もあって、行政としては、研究調査による調査被害のような事例は現在確認していない。むしろ、学生ボランティアの

多様な関与に感謝し、継続を期待する。

- ・ボランティア活動は、同じメンバーの参加に偏りがちになる。授業への組み込みや単位化、現地拠点からのオンライン受講など、柔軟な学修モデルを構築するのが良い。
- ・住民高齢化や人口流出などの構造的課題が、復興の妨げになっている。地域活性化のためには、学生交流の継続的な波をつくることが重要である。

2. フェーズ移行と資材・拠点の「再活用」発想

- ・被災地では、時間の経過とともにニーズの変化が生じている。例えば、発災直後に必須だった仮設テントやインスタントハウス等が、復興フェーズの移行に伴い不要になりつつある。
 - ⇒学生の柔軟な発想で、グランピング、学修拠点、コミュニティースペース、ワークショップスペースなど、二次的用途への転換を模索したい。
 - ⇒学生の拠点住居として活用できないか。現地での滞在とともに大学講義のオンライン受講ができると、学生の長期的・反復的な現地関与につながる。

3. 生業再建・関係人口創出と「半島型」観光モデル

- ・人口流出が続く中で、まずは観光をキーワードに関係人口を創出するのが良いのではないか。金沢大学の観光学の知見を基に、新しい「半島型」の観光モデルを構築するような調査研究や学生の活動により、地域を後押ししてほしい。
- ・空路の活用なども視野に、金沢、富山、能登を結ぶ広域動線を再設計してはどうか。

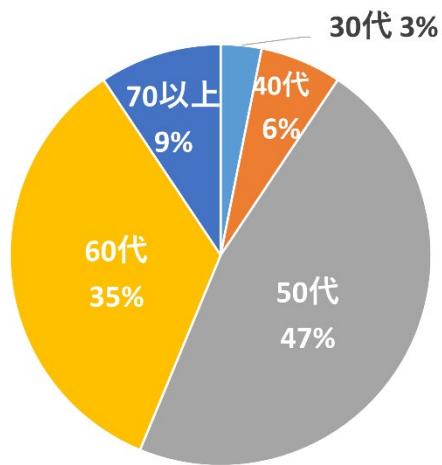
4. 情報発信・参加促進・ワンストップ対応

- ・金沢大学の学生が能登で活動している情報をもっと幅広く発信していくべき。また、時間の経過とともに能登に関心が薄れないためにも、積極的に継続的な情報発信を行うべきである。
- ・現地支援に行きたいが、つながり方が分からずに躊躇する人への支援が課題。現在のフェーズで必要なこと、参加方法、窓口等の具体的な情報を大学・地元双方から継続的に発信することが重要である。
- ・地域に有する大学として、金沢市や大学周辺の関係者ともより一層連携を密にしてほしい。そのためにも地域との関係を構築するわかりやすい連携窓口を設置してもらえると良い。

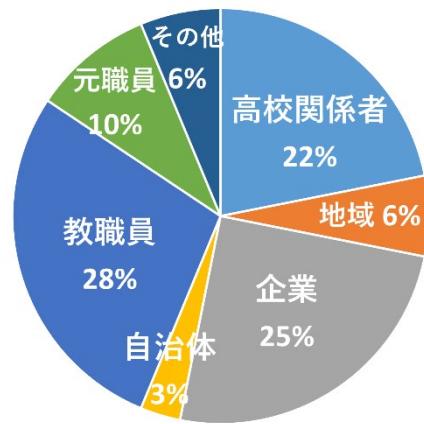
アンケート結果

回収件数〔回収率〕：34 件〔76%〕

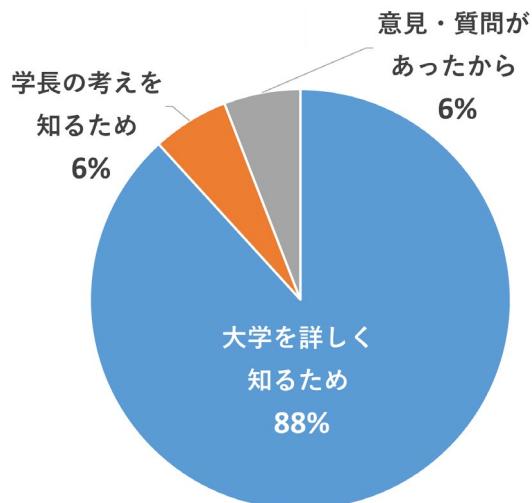
【1. 年齢】



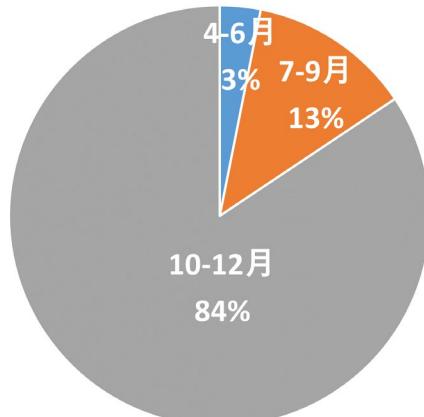
【2. 金沢大学との関係】



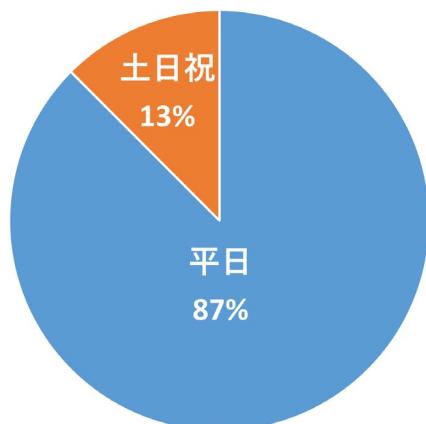
【3. 参加目的】



【4-1. 開催時期】



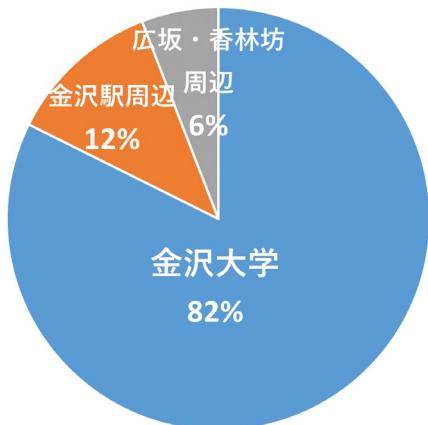
【4-2. 開催日】



(その他のご意見)

- ・父母の会と重ねられないでしょうか？
- ・暑くなく、雪のない季節が良いです。
講義がなければ平日。

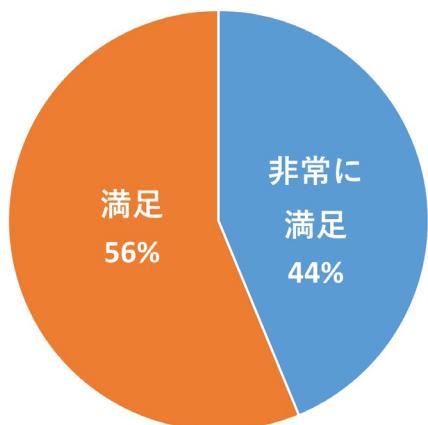
【5. 開催場所】



(その他のご意見)

- ・キャンパス、駅周辺交互がよいように思います。
- ・他の地域での実施もあって良いかもと思います（東京、能登など）。

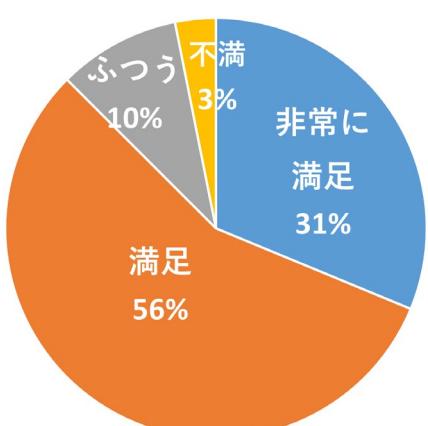
【6. 近況報告】



(その他のご意見)

- ・将来ビジョンに基づく、貴学の取組が十分に理解できました。足元の地域社会から世界を見据えたビジョンまで、未来ビジョン「志」に基づく研究・教育が展開されている熱意が、よく伝わってくる報告内容でした。

【7. 分科会】

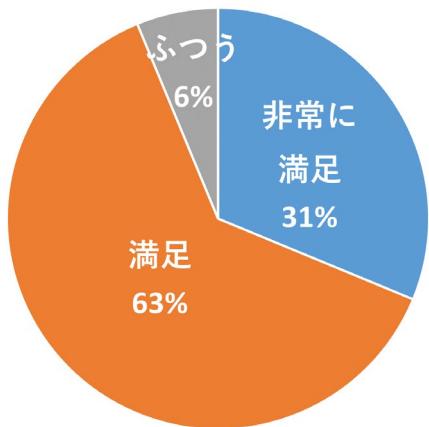


(その他のご意見)

- ・もう少し時間があると協議も深まってよかった。（ほか同意見3名）
- ・対話（議論）を深めるには、主たる問い合わせが必要。
- ・アイスブレイクがもったいない。事前に議論の方向がある程度示せるとよい。
- ・大学の考えを知り、自身の考えも深めながら、意見交換できたことで、今後の大学に期待することや、自社すべきことのイメージを強化できた。

- ・分科会Bに参加させていただいた。留学生と日本人学生との共修教育環境とG.S.科目の必須化により、多様な視点・複眼的な思考が活性化されると感じた。
- ・留学生集めに関して、いうまでもなく安心感や成長実感、愛学心が重要と思う。“顧客満足度”が高ければ次の世代への影響力は上がり、選択肢に入れてもらえる。留学生らが、“なぜ金沢大学を選んだのか”を紐解けば、貴学の魅力が十分に発信されると思う。

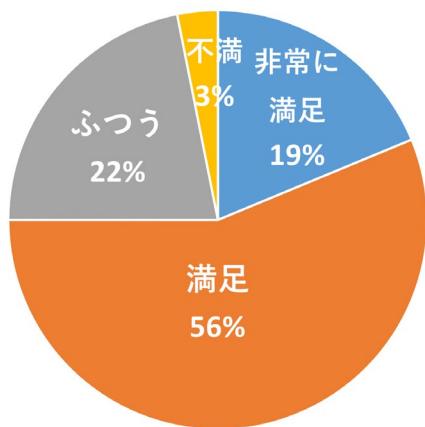
【8. 配布資料】



(その他のご意見)

- ・もう一度、しっかり読み返したいと思う。

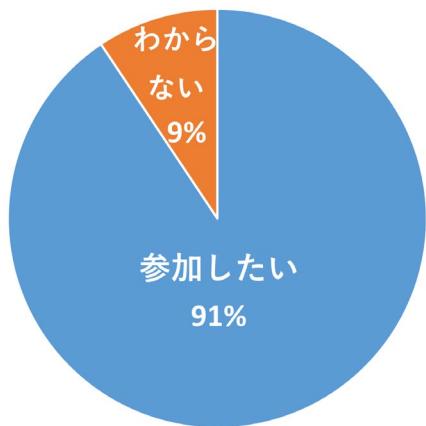
【9. 質疑応答】



(その他のご意見)

- ・意見が少なかった。

【10. 次回も参加しようと思うか】



(その他のご意見)

- ・学類長・系長は報告会だけでも聞いた方がいい。

【11. その他のご意見】

- ・学長先生のお話がとてもわかりやすく、金沢大学の新しい取り組みや今後のビジョンがイメージでき、とても魅力ある大学だと感じました。今後のご発展を願っております。
- ・金沢大学が地域と世界、教育と研究の両方を狙いながら社会貢献を使命感をもって取り組んでいることを知る機会となりました。
- ・いいイベントだと思います。
- ・(6)でも書いたが、様々なステークホルダーが議論するためには、話題提供のプレゼンだけではなく、主たる問い合わせが必要だと思った。そうでないと、議論が拡散し深まらないと感じる。
- ・(昨年度も申し上げましたが) 資料等の事前配布があると助かります(分科会)。60 分は長いようで短いです。案内状のテーマ名だけでは議論の流れを見通すことは難しかったです。
- ・学生の生の声を聴いてみたい！
- ・学生の参加がないとしたら残念に思う。
- ・大学の研究をより詳しくご紹介いただけるとありがたいです。普段そうした機会がないためです。
- ・金沢大学での成果をもっと地域に発信していってほしい。大学のすばらしさがもっと理解されるのではと思います。

- ・すばらしい取組、施設・設備、金沢大学の魅力がもっともっと世の中に、高校生に伝わると良いと思いました。
- ・総合大学なので仕方ないのかもしれないが、全ての説明をそのまま載せるパンフレットではなく、売りとなる部分（高校生にアピールできるところ）を強調し、金大の「色」、ひいてはブランドを作っていくべきだと感じました。
- ・最先端の研究又はそれ以外の大学での研究等、たくさん情報が社会に伝わってくると良いのでは。メディア、新聞、ネット、SNS、HP等、もっと身近に金沢大学が行っていることが伝わるとありがたいです。情報を探さなくても情報が見えてくるようになるとありがとうございます。
- ・地域貢献室廃止に伴う地域とのかかわりが薄くなっているが、共創企画室の役割や目的、取り組みをもっと広め、活動の地域との関わりを強化してほしい！
- ・就活支援体制、就職先などについて詳しく知りたい。
- ・昨年KUGS入試で合格をいただいたご縁で、初めて案内をいただき参加させていただきました。各地区を代表するような県内の出席者が大半を占め、やや場違いではなかったか感じました。県外からの参加となりましたが、これも“多文化共修”ということでご容赦ください。今後とも、よろしくお願い申し上げます。

多くの貴重なご意見をありがとうございました。

～昨年度からの変更点～

昨年度のアンケートのご意見を踏まえ、以下のとおり実施方法等を変更しました。

【分科会】隣のブースの声で発言が聞こえづらい。⇒ 1部屋につき1つの分科会を配置。
分科会の時間が長い。⇒ 75分から60分に短縮。また、ステークホルダーの皆様と本学構成員とのより密接な意見交換の場を提供するため、協議会終了後にオプショナルプログラムとして意見交換会「雑談のチカラ」を実施。

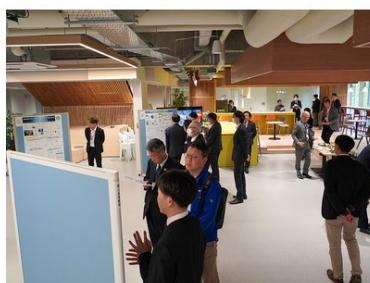
【配布資料】オンラインで参加する場合にも手元で資料が読めるとありがたい。
⇒ オンライン参加者へ会場資料を事前にメール配布。
分科会での意見出しのため、分科会の概要を事前に知りたい。⇒ 分科会の導入資料として、分科会テーマの関連情報を事前に送付。

また、今年度は、ステークホルダーの皆様に本学の最先端研究等を知る機会をご提供するため、オプショナルプログラム 「J-PEAKS『未来知実証センター見学会』」を実施しました。

(ニュース記事) <https://www.kanazawa-u.ac.jp/news/173631/>



未来知実証センター見学会（施設見学、ポスターセッション）



意見交換会「雑談のチカラ」



発行・編集 金沢大学総務部総務課

〒920-1192 石川県金沢市角間町

電話 076-264-5111